

南の風



SHAPLANEER

vol. **304**
2024.June



特集

地域は変わる、
働く子どもがいない村をめざして



特集

地域は変わる、働く子どもがいない村をめざして

——ネパール児童労働削減事業終了の報告——

報告／横田 好美（事業推進グループ）

世界で児童労働（※1）に従事する子どもの数は1億6,000万人（※2）。しかし、ネパールでは世界の子どもの10人に1人を上回る7人に1人が働いているといわれています（※3）。シャプラニールでは児童労働の削減をめざし、2021年からマクワンプール郡マナハリ村において地方行政の児童保護機能の強化、児童労働に陥る可能性の高い子どもの生活状況の改善、コミュニティ（※4）の中での子どもを働かせないという意識の醸成といった活動を行ってきました。

3年間の事業の終了にあたり、目標の達成度や次の事業への教訓、改善すべき点を明らかにするため2024年1月に終了時評価を行いました。本特集では、この事業によって起こったコミュニティ、人々の変化や成果、今後の展望についてお伝えします。

※1 児童労働とは、15歳未満（途上国では14歳未満）の子どもが義務教育を受けずに働くことおよび18歳未満が危険有害労働などに従事すること。

※2 国際労働機関（ILO）と国連児童基金（UNICEF）による共同報告書（2021）より。5歳～17歳が子どもと定義されている。

※3 ネパール児童労働レポート（2021）より。ILOネパール事務所とネパール政府中央統計局が2017年～2018年の調査をもとに分析。5歳～13歳は週1時間以上の労働、14歳～17歳は週36時間以上の労働を児童労働と規定している。

※4 本特集では、集落から市・村範囲の行政単位としての地域社会そのもの、またはそれを構成する住民、住民組織や商店会などの組織を指す。

地域で児童労働を減らすためのプロジェクト

事業期間	2021年3月～2024年5月
パートナー団体	CWIN（シーウィン／Child Workers in Nepal Concerned Centre）
事業地	バグマティ州マクワンプール郡 マナハリ村（2区、4区、6区、8区）
直接受益人口	3,242世帯15,890人
事業目標	マナハリ村で児童保護政策および児童労働削減行動計画に沿って児童保護機能が強化される。



Contents

特集

地域は変わる、働く子どもがいない村をめざして ——ネパールの児童労働削減事業終了の報告——

- マナハリ村の児童労働は減ったのか？
- 個別支援の成果と気づき
- 終了時評価を終えて
- 「教育とソーシャルワークを通じた児童労働削減事業」が始まりました
- 主な活動・おわりに
- この人に聞きたい
「望まない孤独」をなくすのはつながりの仕組み
NPO法人あなたのいばしょ理事長 大空 幸星さん
- プロジェクトニュース〈準備編〉
ネパール 若者たちを主役につつ支援するために
- 「THE★FORUM 2024」開催報告 みんなで学んで、楽しい。
- シャプラニール情報発信に関するアンケートの結果報告
- 理事・評議員からのメッセージ
ゆるやかに続くバングラデシュとの縁
シャプラニール評議員／大学職員 吉川 みのりさん
- シャプラバ
シャプラニールと一緒にボランティアの視野を広げていきたい
学習院女子中・高等科 ボランティア同好会
- クラフトリンク
エイブルアート・ジュートバッグに新デザイン登場！
- スタッフの想い
「好き」からつながった世界
コミュニケーショングループ 下鳥 舞佳
- シャプラ文化部
意外に知られていないベンガル料理「ボッタ」
- 東京マラソン2024チャリティ報告
- 事務局長交代のご挨拶
- お知らせ



SHAPLANEER

「取り残さない、その小さな声を。」

戦争や大規模な自然災害など、
多くの人々を苦しめる事件の裏で
日々の暮らしそのものに
困難を抱えている人がいます。

そういった声なき声をすくい上げ、
一緒に感じ、考え、行動し
少しでも明日に希望が持てるよう、
ともに歩んでいくこと。

それがシャプラニールの考える
「誰も取り残さない」という精神です。

シャプラニールは1972年に創立された国際協力NGOです。貧困のない社会の実現を掲げ、南アジアと日本国内で、児童労働の削減と予防、防災・減災支援、フェアトレードへの取り組みや多文化共生事業などを通じた「取り残された人々、課題」の問題解決を行っています。

南の風 通巻304号（季刊）
2024年6月1日発行

発行元 認定NPO法人
シャプラニール＝市民による海外協力の会
発行人 坂口和隆
編集長 藤岡恵美子
編集 勝井裕美 高階悠輔 長瀬桃子
デザイン 柴田篤元
印刷 株式会社上毛印刷

東京事務所
（火曜から土曜10:00～18:00／日曜、月曜、祝日定休）
〒169-8611
東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863 FAX 03-3202-4593
Email info@shaplaneer.org
Web https://www.shaplaneer.org/

マナハリ村の児童労働は減ったのか？

本事業では対象地域において児童労働が50%減少することを目標にしていました。終了時評価で行った100世帯を対象とした標本調査では、現在働いている子どもは2名であることが確認されました。事業開始時の600世帯に実施した同様の調査では、児童労働に従事する子どもは242名だったため、対象地域では児童労働者数が減少したことがわかりました。ここでは、私たちの児童労働を減らすための取り組みとその成果についてご報告します。

1 地方行政（児童保護・権利委員会）の能力強化

具体的な活動

●政策の整備支援

村独自の「児童保護政策」や商店街などで児童労働がないか見回るモニタリングの方法を含む「児童労働撲滅行動計画」の策定を支援。

●能力強化のための研修

児童保護・権利委員会（以下、委員会（※5））を対象に、政策や行動計画の実施方法に関する研修などを実施。

成果

●定期的な会議やモニタリングの実施

すべての区の委員会が会議やモニタリングを実施していました。レストランや自動車整備工場などで計6回行ったモニタリングで、12歳から17歳の子ども28人が働いていることがわかり、子どもには心理カウンセリングを、雇用主に対しては当局からの正式な取り締まりなどの法的措置を取ると警告を行いました。



「子どもたちを働かせず学校へ行かせよう」と呼びかける啓発看板

2 児童労働に陥る可能性の高い児童への個別支援

具体的な活動

●個別支援ガイドラインの作成支援

日本の社会福祉専門家のアドバイスを受け、児童労働に従事している、または陥る可能性の高い子ども（以下、ハイリスク児童）の選定方法や個別支援の手順、支援記録の管理方法等を記載したガイドラインを作成。

●ハイリスク児童の家庭への個別支援の実施

ガイドラインを基にハイリスク児童200名を選定し、各世帯のニーズに合わせた支援を実施。具体的には、児童の家庭を訪問して、暮らしの状況（保護者の就労状況や健康状態、教育の状況など）を確認し、それぞれの家庭に必要とされる支援を検討のうえ、教育費の補助を行ったり、行政や学校、医療関係機関、カウンセリングや法律の専門家につないだりなど、適切な対応が取られるように支援した。

成果

●約95%の子どもが児童労働に従事せず

継続的に学校に通っている

200名のうち80%（160名）の子どもが児童労働に陥っていないことを目標に掲げていましたが、評価ではハイリスク児童の約95%（189名）が学校に通い、児童労働に従事していないことを確認しました。支援を受けた子どもたちの親からは「もし支援がなかったら子どもを働かせていたかもしれない」という声もありました。

3 地域住民や子どもへの意識啓発

具体的な活動

●行動を起こすための研修

子どもクラブ（※6）と集落開発委員会（※7）を対象とした子どもの権利や児童労働に関する研修の実施、子どもの権利や児童労働の問題、教育の重要性などを広く伝えるための子どもクラブによるラジオ番組の制作支援。

●マンガ制作ワークショップ

子ども自身の児童労働の経験をマンガに描くワークショップを実施。また、そのマンガの展示会を行い子どもたちの経験、現状をコミュニティへ共有した。

成果

●子どもによる児童労働削減のアクション

クラブのメンバーは児童労働の事例を村に報告、またハイリスク児童の家庭を訪問し児童労働を未然に防ぐなど行動を起こしました。



隔月で行う家庭訪問の様子。パートナー団体のスタッフが各家庭の生活状況の変化や悩み事を確認し支援を検討した

漫画タイトル:新しいお母さん



- ①父が再婚した義母はきっと優しい人に違いない。
- ②（しばらく経ち）お願い！ 私たちをたたかないで！
- ③もっと勉強したい。
- ④学校に行かせてもらえず、義母に搾取されている。



パソコン研修を受ける少女。パソコンが使えると会社の受付や事務の仕事に就くことができる

本事業ではもともと児童労働に陥る可能性の高い家庭に個別のニーズに合わせた支援を行うことはできましたが、予算や人的資源の制約から対象人数を200名と限定せざるを得ませんでした。選定基準に沿って支援の優先度の高い順に選びましたが、201人目との差がはつきりとあるわけではなく、201人目からはまったく支援が必要ないというわけではありませんでした。事業期間内に200名よりも生活状況が悪くなってしまった可能性もあり、必要とする人に支援を届けるという当たり前に思えることを実現する難しさや限界を感じることもありました。

村の子どものための予算は増えましたが、これまで行ってきた取り組みを事業終了後、村が継続していけるかどうかについては懸念があります。村に引き継ぐ個別支援についても、その実施状況を注視していく必要があります。村が引き続き児童保護政策に沿った予算配分をし、子どものために必要な取り組みを行うとともに児童保護・権利委員会が自主的に活動するようにフォローアップを行っていきます。

地方行政の児童保護機能の強化



終了時評価のための訪問にて、生活の変化について語る母親（手前左が小松前事務局長）

減った児童労働と村の変化

終了時評価では、さまざまな成果を確認できました。地方行政の児童保護機能の強化のための取り組みによって、労働局、警察といった関係者や、区と村の連携が進み、子どもに関する情報共有がスムーズになり、モニタリングをより効果的に行えるようになりました。また、画的で一律の支援ではなく、問題を抱える家族に寄り添い、家庭の状況に応じた個別支援に取り組むという新しいチャレンジに対して、児童

終了時評価を終えて

労働に陥りそうであった子どもの約95%が児童労働をせずにいるという成果を得たことは、私たちの大きな自信になりました。子どもクラブのメンバーをはじめ、若い世代が児童労働を自らの問題と認知し、解決に向けて行動を起こしている姿には目を見張るものがあります。

子どもたちへの継続した支援のために

支援が必要な人を取り残さない

個別支援の成果と気づき

個別支援では、各家庭の状況を丁寧に聞き取りきめ細やかな支援を行ったことで、ハイリスク児童を児童労働に陥らせないだけでなく、その家族をも支えることができました。その一方で中退と児童労働の関係がより鮮明に見えてきました。

column 1 家族みんなが未来を描けるように

年長のきょうだいを対象に行った技術研修を通じて本人の希望する仕事に就くことをめざした取り組みは、家族みんなの希望となりました。



私、美容師になりたい！

17歳のタラさん（仮名）は5人きょうだいの長女で、12年生（日本の高校3年生）。父親は運転手として働いていますが、世帯の月収は約2万ルピー（約2.2万円）と7人家族が1日2回食事をするこさえ難しい状況でした。また、きょうだい在今后学校を中退し児童労働に陥る危険もありました。

家庭訪問での話し合いでタラさんが美容師になりたいということがわかり、事業では3カ月の美容トレーニングの受講を支援しました。彼女は毎日、放課後に

美容室で指導を受け、今ではスキンケアやオイルマッサージ、ヘアアレンジなどができるようになりました。指導をした女性は、「美容の仕事はお祭りや結婚式などでニーズがあるし、客から値切られにくい。道具があれば自宅でも働ける。女の子たちに手に職をつけて生きていって欲しいからこのトレーニングを引き受けたの。タラさんの仕事ぶりはいつも真剣で丁寧よ」と話してくれました。現在、タラさんは就職活動中で、「美容室に就職できれば弟や妹も安心して学校に通い続けられる」と嬉しそうに語ってくれました。



指導をした女性（中央）、一緒に研修を受けた仲間（右）と

column 2 明らかになった学校中退と児童労働の関係

個別支援を行った200名のうち、約95%（189名）は児童労働に陥らず継続して学校に通っています。その一方で、残りの約5%（11名）は中退していることを確認しました。

中退に至った背景は複合的で各家庭によって異なっており、中退を未然に防ぐ方法を見出すことは簡単ではありません。11名の中退理由は勉強に興味がなくなった（7名）、結婚（2名）、ほかの地域への移動（就学状況不明、2名）となっており、右のケース報告にあるように、進級試験で落第を繰り返し不登校になった、勉強が苦手で興味が持てなくなったことなどを理由に挙げる子どもが比較的多いことがわかりました。

ケース報告

「学校に行くより働いたほうがいい」

ディパックさん（14歳、仮名）

学校を中退後、川沿いでトラクターに石を積み降ろす仕事をしている。1日約1,000ルピー稼げる。同じ学年で2回も進級試験を落第し、もう学校には行きたくない。父親は5年前から精神病と心臓病を患い、母親は家計を支えるため忙しく働いているため、子どもの教育や将来について考えることができない。

事業の背景

これまでマナハリ村の多くの子どもたちが働くためにカトマンズのような大きな都市へ出ていく傾向があると認識していましたが、それだけではなく隣接するヘタウダ市へ働きに出ていることが分かりました。そこで本事業では、2つの地域が連携し、学校を介した施策を通じて児童労働の削減に取り組みます。

ネパールの教育の現状

2016年制定の新教育法により、1年生から5年生までであった基礎教育制度が1年生から8年生（日本の5歳～12歳）に延長され、公立学校では無償で教育を受けられるようになりました。しかし、人員面、施設面では教育環境は十分に整備されておらず、教育の質は向上していません。貧困、学校までの交通の便の悪さ、ジェンダーによる不平等性や民族的な格差などの問題が、特に農村部の子どもたちの教育を受ける機会の障壁となっています。ネパール政府によると、初等教育の純就学率は95.3%ですが、5歳～12歳の77万人が学校に通っていません。また、毎年4.8%が中退しており、再履修率（進級できず留年する）も高く、教育分野における大きな問題の一つとなっています。



小学校低学年クラスの授業の様子

事業地の中退の状況

ヘタウダ市とマナハリ村によると、各区で平均60人が家庭の経済状況、児童婚、学校や教育への興味や意識の欠如、周囲の影響などを理由に中退しています。中退の可能性のある子どもに対して学校や地方行政、コミュニティが柔軟に対応する環境や体制は十分整えられていません。そのため中退抑止の役割が家庭にのみ大きく負わされていますが、保護者をはじめとする家族が教育の重要性や児童労働による弊害について十分に理解しているとはいえません。右のデータからも中退した子どもは児童労働に従事する可能性が高いといえます。

	全児童数	中退者数(全体数のうちの割合%)	中退者のうち労働している人数
ヘタウダ市	5,688名	324名(約5%)	133名(中退者の約41%)
マナハリ村	3,500名	106名(約3%)	36名(中退者の約37%)

■ヘタウダ市とマナハリ村の公立学校計20校における児童労働の現状(2024年2月時点)

児童労働の送り出し・受け入れ地域

これまでの事業では、マナハリ村から首都カトマンズに出てくる子どもと、他地域からマナハリ村に仕事を求めてやってくる子どもの両方が多く、マナハリ村は児童労働の送り出し・受け入れ地域であると考えて活動してきました。一方で、マクワンプール郡の郡都でありマナハリ村に隣接するヘタウダ市にもマナハリ村から移住し労働する子どもが多いことが事業を通じて明らかになり、マナハリ村が送り出し地域、ヘタウダ市が受け入れ地域という関係であることがわかりました。子どもたちの多くは、採石場、ホテル、レストラン、工場、建設現場などで危険な仕事をしています。またヘタウダ市から首都カトマンズやインドに働きに出る事例もありました。



マナハリ村を通る幹線道路沿いの商店街

「教育とソーシャルワークを通じた児童労働削減事業」が始まりました

これまでの事業を通じて、教育環境が十分に整備されておらず、教育の質を担保できていないことによる子ども本人や保護者の教育への関心の低下や、友達など周囲からの労働への勧誘やあっせんなども児童労働を促す大きな要因となっていることを再確認しました。

2024年3月より開始した新規事業では、これまでの地方行政やコミュニティとの取り組みに加え、学校の教育環境を改善し、ソーシャルワーク(※9)を通じて子どもやその家族に寄り添った対応を行います。子どもが継続的に学校に通いたくなるようモチベーションを上げることで中退を防ぎ、さらには児童労働を減らすことをめざします。

※9 地域社会や住民グループ、学校、地方自治体などの多岐にわたる関係者を結び付け、社会変革を進めながら、社会的に困難な状況にある当事者とその家族の生活上の問題の解決、緩和に取り組むこと。

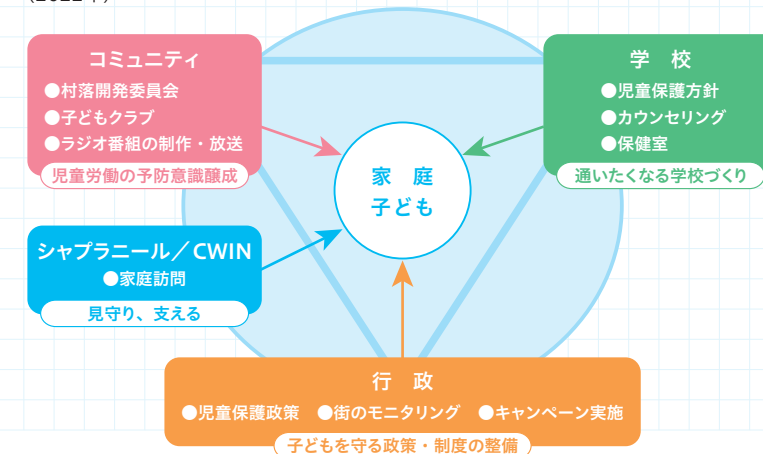
事業期間 …… 2024年3月～2027年3月(3年間)
 パートナー団体 … CWIN(シーウィン/Child Workers in Nepal Concerned Centre)
 事業地 …… ネパール・バグマティ州マクワンプール郡ヘタウダ市(1区、3区、10区、11区、19区)
 マナハリ村(1区、3区、5区、7区、9区)
 直接ひ益人口 … 9,734名(公立学校の生徒約6,100名、地方行政関係者、地域住民等3,634名)
 事業目的 …… ヘタウダ市、マナハリ村における児童労働を学校とコミュニティの関与を強化することによって削減する
 目標 …… 対象地域において中退率が50%減少し、児童労働がなくなる



児童労働反対世界デーに実施した絵画イベント(2022年)



行政職員や警察、労働局の担当者とともにモニタリングを実施(2023年)



学用品の支援などを受け、現在も学校に通っていると語る少年(右)とパートナー団体のスタッフ

主な活動

コミュニティ全体で中退を防ぎ、 児童労働を減らすために

2. コミュニティにおける ソーシャルワークの実施

学校や地方行政と連携し、中退や児童労働の可能性のある子どもとその家族に対して働きかける

- パートナー団体による家庭訪問の実施
- 学校、地方行政との家庭訪問の状況に関する共有会議の開催



1軒1軒家庭を訪問し生活状況の聞き取りを行うスタッフ(右)

4. コミュニティにおける 意識啓発

地域住民が教育の重要性や児童労働の弊害を理解し、それぞれの立場で問題解決のための行動を起すようになることをめざす

- 子どもクラブを対象とした研修や運営の支援
- 児童労働や教育の問題についてのマンガ制作ワークショップの開催
- ラジオ等メディアを通じた子どもの権利や児童労働に関する啓発活動に取り組む



子どもクラブのラジオ番組収録の様子

1. 学校の環境整備

制度や設備を整え、子どもが安心して継続的に学校に通えるようにする

- 精神的・身体的虐待などのあらゆる暴力から子どもを守り、安全な教育環境を確保するための指針となる学校児童保護方針の策定を支援
- 児童に関する問題に学校児童保護方針に沿って対応するための校長、教員、PTA、子どもクラブのメンバーからなる学校児童保護委員会を結成
- 子どもの権利と児童保護に関する研修を学校運営委員会、保護者、教員、子どもクラブを対象に実施
- 保健室設置、教室やトイレの改修
- 養護教員対象カウンセリング研修の実施

3. 地方行政との取り組み

地方行政が自らの責任として中退防止や児童労働削減に取り組むことをめざす

- 市、村、区の関係者の児童保護政策会議の開催
- 定期的な児童労働モニタリングの実施
- 児童労働についての啓発看板の設置
- 児童労働撲滅キャンペーンの実施



区の関係者による会議の様子

おわりに 児童労働を根本から解決するために

児童労働の要因にはさまざまな背景が複雑に絡み合っています。その一つひとつを解きほぐし、解決していかなければ児童労働の問題が解決することはありません。これまでの活動から、学校は児童労働を減らすための重要なアクターの1つであるという認識を強くし、学校での取り組みを新しい事業に入れることにしました。少なくとも学校にいる時間は働くことができないため、継続して学校に通うことは児童労働の防止につながります。児童保護機能の強化を進めてきたマナハリ村と児童労働の受け入れ地域・送り出し地域であるヘタウダ市の連携を促進することで、より効果的に児童労働を減らすことができると考えています。



マナハリ村8区の地域住民との会合に参加したメンバーと(中央が横田)



この人に
聞きたい

シャブラニールの活動にさまざまな形でつながりがある方、国際協力、社会貢献などの分野で活躍されている方に、その思いを伺っています。

インタビュー・文／朴 娟景
(事業推進グループ
多文化共生事業担当)

NPO法人あなたのいばしょ理事長 大空 幸星さん

「望まない孤独」をなくすのは つながりの仕組み

の下に立っていました。「過去を

悲観するな。今何ができるかを考

えなさい」というその言葉が、私

の人生を大きく変えました。私

にとつての恩師の存在のように、

悩んでいる人が信頼できる人に

相談できる身近な場所をつくり

たいという思いで、2020年

3月にNPO法人あなたのい

ばしょを立ち上げました。

大学在学中に

「あなたのいばしょ」を設立

小学5年生のときに母親が家を出るなど、

複雑な家庭環境で育ってきました。高校時代は

学費や生活費を稼ぐため昼夜アルバイト漬けの

日々で、一時は生きる気力を失うほど追い込ま

れていました。ある日の夜中、高校の担任の先

生に「しんどい。もう学校をやめたい」とメー

ルを送ると、翌朝には先生が私の住むアパート

この人に
聞きたい

シャブラニールの活動にさまざまな形でつながりがある方、国際協力、社会貢献などの分野で活躍されている方に、その思いを伺っています。

インタビュー・文／朴 娟景
(事業推進グループ
多文化共生事業担当)

NPO法人あなたのいばしょ理事長 大空 幸星さん

「望まない孤独」をなくすのは つながりの仕組み

の下に立っていました。「過去を

悲観するな。今何ができるかを考

えなさい」というその言葉が、私

の人生を大きく変えました。私

にとつての恩師の存在のように、

悩んでいる人が信頼できる人に

相談できる身近な場所をつくり

たいという思いで、2020年

3月にNPO法人あなたのい

ばしょを立ち上げました。

私たちは、24時間365日、年齢や性別を問わず、誰でも匿名で相談が可能なオンラインチャット相談窓口を運営しています。1日約1000件〜1500件もの相談が寄せられていて、その利用者の約7割が女性、8割以上が10代〜20代です。総務省の調査によると、10代の平均的なSNS利用時間が54分であるのに対し、携帯電話の利用時間はわずか0・6分。電話ではなくチャット窓口を設立したのは、こうした子どもや若者たちのためでもあります。

めざすは「マイナスからゼロ」

厚生労働省によると、2023年の子どもの自殺者数は513人と報告があります。相談窓口において、死にたいという言葉を口にする相談者に出会うことは決してめずらしくありません。そこで私たちは、相談窓口の役割として、こうした相談者の気持ちを「マイナスからゼロ」へ導くことを掲げて活動してきました。具体的には、学業、仕事、人間関係といったさまざまなことに起因して死にたいと思うほど追い詰められている相談者を「マイナス」の状態、そして明日から新しく何かを始める、家から出て活動する、頑張ってみるという自発的に行動できる最もエネルギーの多い状態を「プラス」、その途中を「ゼロ」と考えています。ここで最

も重要なのは、「マイナス」状態の相談者の傾聴を重ねることです。すると相談者は「話を聞いてもらって気持ちが少し楽になった」「またちよつと散歩してみようと思った」といった反応を示してくれるようになり、「ゼロ」の状態まで導くことができます。

社会との「つながり」のきっかけを

相談者を「プラス」に導くまでの方法に、社会的処方事業として「いばしょチケット」を発行しています。社会的処方とは、孤独や希死念慮を抱く人に、自然や芸術に触れる機会や食糧等の現物支給を通じて地域社会とのつながりを生み出し、レジリエンス（自発的な心の回復）



につなげるアプローチのことです。美術館やプラネタリウム、ヨガなどを無料で体験できる電子チケットを提供する企業、自治体と連携した取り組みで、自殺防止対策の一つとして注目されています。

例えば、「絵を描くことが趣味だったけど今は興味がなくなってしまう、手を動かそうとも思わない」といった相談があった場合、まずはお話を聴きます。そして相談員が「プラス」の状態に導けると判断した場合、半歩踏み出してもらったきっかけづくりとして、いばしょチケットを発行しています。これまでのように絵を描くのは難しくとも美術を鑑賞をすることはできるかも、というレジリエンスにつなげるアプローチを行うんです。

「つながり」が新たな「つながり」を生む

私たちは、国内外に在籍する約1000名の「いばしょ相談員」同士の横のつながりを大事にしています。常にリモートで働く相談員は孤独、孤立しがちな状況が発生しやすいことに気がついたんです。やっぱり、一人の相談員も孤独を感じさせない、孤立させないということが重要で、こうしたこともすべてが私たちの「孤独・孤立対策」へつながっていくと思うんです。

かに頼っていいんだ、相談してみようかなと、一人ひとりが思える社会のサイクルをつくりたいんです。

いま、そしてこれから

今後はより一層、「望まない孤独」を感じる人が相談しやすい社会の仕組みを、法制度を活用してつくっていききたいです。「孤独・孤立対策推進法」の施行は国を挙げての孤独・孤立対策のスタート地点にしか過ぎません。次に必要なのは、相談者とその周りの人たちを含む社会の考えや偏見に影響を及ぼしている法制度の改革。ここを変えることができれば、話したくても話せない、頼りたくても頼れないといった「望まない孤独」を抱えた人が、「信頼できる人に確実にアクセスできる孤独・孤立対策」のある社会へ変わると信じています。



地域におけるつながりづくりについてお話す講演会にて

同士が相談する場として開催されていました。が、今では相談に限らない「交流会」として、好きな映画の話をする会や近い年齢層で集まる会など、さまざまな形で相談員のつながりが生まれる場に変化してきました。特に今は、誰もがコロナ禍を経験し、社会でのつながりや地域のつながりが薄くなってきたというなかで、大変嬉しい取り組みになってきました。

世間を動かしたのは……

NPO設立時から注力してきた、社会で孤独を感じたり孤立したりする人を支援する趣旨の「孤独・孤立対策推進法」が2024年4月に施行されました。法制化という極めて難しい活動でしたが、なにより世間を動かすことができたのは社会の実態を統計データで伝えたことだと改めて感じています。

相談をすることが恥ずかしい、怖いといった社会の風潮があるなかで、相談窓口の利用を呼びかけるだけではそういった世間の認識を変えるには限界があると思っています。自分が意図せず陥る「望まない孤独」がいかに問題を深刻化させ、新たな社会問題を生むのか、統計データを使って国へ訴え続けてきました。「いばしょチケット」も孤独対策にどう貢献できるか社会調査の目的を兼ねた活動でもあります。法制度が変われば、個人の視点・感じ方が変わる。誰



PROFILE

おおぞら・こうき

2020年3月、「信頼できる人に確実にアクセスできる社会の実現」と「望まない孤独の根絶」を目的に、NPO法人あなたのいばしょを設立。2024年4月、「孤独・孤立対策推進法」の施行に尽力した。著書に『望まない孤独』、『「死んでもいいけど、死んじゃだめ」と僕が言い続ける理由 あなたのいばしょは、必ずあるから』等がある。




- 1 学生インターンのカルナさん(左)が若者と同じ目線で座談会を進行する様子
- 2 若者向けの洋裁研修での聞き取り調査に参加した女性たち
- 3 課題となることは何か、若者向けNGOの職員らと議論する様子
- 4 自身の経験を共有する機会は限られていると話す女性たち
- 5 オルガプリ職業訓練センターの若者たちとキル職員(後列右)

座談会に参加して
感じたこと

トリフバン大学環境学部4年生
ジャラナ・ジリさん

私は半年後に大学を卒業しますが就職先が決まっています。ネパールは企業が少なく、しかも経済の不安定さから多くが採用を行っていないと思います。海外に就職したいと思いますが、エージェントへの手数料、飛行機代など私の家では資金を立てられません。毎日将来と今に不安を感じています。座談会に参加して、この様な状況なのは私一人ではないと知り気持ちが軽くなりました。今回できた仲間とつながって不安を話し合うことができたと思っています。

若者の
声



届かない若者の声

次に若者60名へのインタビューと座談会を行いました。大学院生、レストラン従業員、学校を卒業しても職につけていない若者など、さまざまな立場の人と語り合いました。メディアで若者の問題は毎日のように聞かれますが、自分たちが社会の中で孤立している現状をおとなは本当に改善しようとしているのかという疑問や、自分たちの声を社会に届け自分たちも問題解決に携わりたいという声も多く聞かれました。確かに若者が主体となって問題解決をめざすといった取り組みは政府を含め現時点ではあまりありません。

シャブナニールは若者自身が主役となるような伴走支援をし、問題の解決につながるという方法もあるのではないかと考えています。引き続き調査を行い、新たな活動の立案を進めていきます。

PROJECT NEWS

プロジェクト
ニュース

準備編



若者が置かれる現状を親身に聞くキル職員(左)

ネパールの若者たちを主役にして 支援するために



ネパール事務所 シニア・プログラムオフィサー
キル・ガレ



ネパールでは、経済の不安定さから多くの若者たちが職につけていないことが大きな社会問題となっています。海外へ出稼ぎに行く人も多く、2023年は90万人が出稼ぎのために母国を離れています。また職につけない若者は、違法薬物や売春等の犯罪に巻き込まれることも多く、また精神疾患者も増えていることも挙げられています。そこで私たちは、この若者を取り巻く問題について向き合いサポートができないかと、ネパール事務所でも働くことになった大学生インターンのカルナさんとともに調査を始めました。

不十分な若者への支援

まず若者への支援をしているNGO数団体を訪問し、彼らの活動についてインタビューしたところ、キャリアアカウンティングや職業訓練などを行っていることがわかりました。さらに、インタビューを重ねる中で見えてきたことは、若者を取り巻く問題は年々深刻化してきていること、問題の要因が多岐に渡るため、明確な支援ができていないと

シャプラニールの情報発信に関するアンケートの結果報告

報告／下鳥 舞佳（コミュニケーショングループ 広報担当）

シャプラニールはウェブサイト、SNS、会報など郵送物を通し、団体や活動についての情報を支援者の皆さまに伝えています。より多くの方に必要な情報を適切な量とタイミングでお届けするために、会員、マンスリーサポーターの皆さまを対象に情報発信に関するアンケートを実施しました。その結果を報告いたします。

対象者 会員、マンスリーサポーター 2,810名

実施方法 アンケートはがき（会報302月号同封）、ウェブフォーム

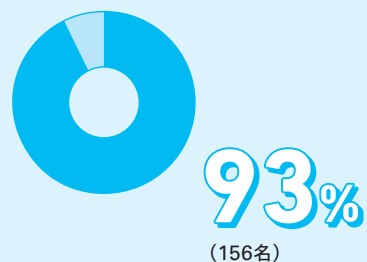
回答者 166名

回答受付期間 2023年12月1日～2024年1月15日

回答・結果のハイライト

●媒体

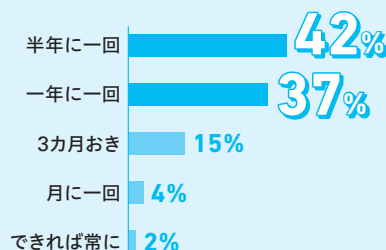
郵送物から情報を得ている方が多い



複数回答した方もいるが166名中156名が、シャプラニールの情報を得るときによく使う媒体として郵送物を選択。インターネットが苦手な方も見られ、アンケート上ではウェブサイトやSNSを定期的にチェックしている方はそこまで多くないという結果となった。

●活動報告の頻度

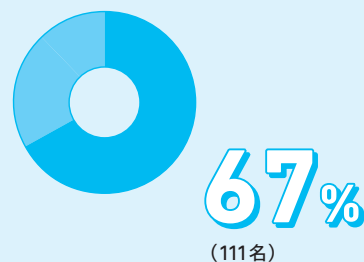
半年または年一回の頻度を希望する方が多い



「活動報告（事業進捗や成果）はどのくらいの頻度で知りたいか」という問いに対し、現状の年4回の会報の発行頻度よりも低い、半年、年単位で報告を受けたいという回答が多かった。理由として印刷物の経費削減をあげる方が多く、またすぐに分かりやすい成果が見えない活動はある程度長期の報告として知りたいという意見もあった。

●活動とのかかわり方

寄付、商品購入で活動にかかわっていきたい方が多い



「団体や活動とどのような形でかかわりたいと考えているか」という問いに対し、半数以上が「寄付・購入で応援」のみを選択。その次に多かったのは「イベント参加」が32名、「現地訪問」で24名であった。

そのほか多く見られた意見

- 印刷物や郵送物が多い印象がある（24名）
- LINEでの配信を増やして欲しい（6名）
- 会報の内容が多く、読みきれない（12名）
- 映像での発信を増やして欲しい（5名）
- 現地の声をもっと聞きたい（9名）

情報発信の改善に向けて

NGO業界だけでなく、企業・団体が印刷物のデジタル化やSNS発信の強化等の動きが見られる今、私たちも時代に合わせた情報発信の方法を柔軟に改善していく必要があることを本アンケート結果からも改めて感じました。ご協力いただいた皆さま、貴重なご意見をありがとうございました。

2024年度より、シャプラニールは会報誌のコンテンツを見直し、発行を年2回（6月・3月を予定）へと変更し、秋ごろに前年度の活動をまとめた年次報告書を会員、マンスリーサポーターの皆さまへお届けする予定です。

「THE★FORUM 2024」開催報告

みんなで学ばって、楽しい。

報告／朴 娟景（事業推進グループ）

2024年3月29日（金）～31日（日）、ワークショップや議論などを通じて国際協力やNGOについて考え意見を交換する、中・高生向け宿泊型イベント「THE★FORUM 2024 ～時代は変わった、国際協力はどうだ～」を国立オリンピック記念青少年総合センターで開催しました。今回は、イベントの実施に向けた準備から当日の様子まで、ボランティアである実行委員12名の頑張りを含め報告します。

実行委員である大学生とOB・OGメンバーは、2023年10月からほぼ毎週末、準備を重ねてきました。議論が足りないと感じたときには、平日にも集まるほど強い思いを持って活動するほどでした。特に、それぞれのワークショップを通じて、参加者に伝えたいことは何か？を考え、そのワークショップを行う目的を明確にするために議論する姿、またその目的を参加者に自ら考えてもらうためにクイズや参加型アクティビティを取り入れようと試行錯誤しながら進める姿が印象的でした。

イベント当日には、山梨や広島といった遠方からも参

加者が集まりました。3日間で計10のワークショップを行い、それぞれ寄付、フェアトレード、児童労働など国際協力おけるさまざまな課題について人の意見を聞き自分の意見を発信し、議論をとことん重ねました。「とても楽しく、新たな学びを得られた」という声もあり、「国際協力」を身近に感じられた参加者が多かったようです。実行委員からは、「中高生の参加者との交流を通じて、私たちもより深く国際協力について学ぶことができた」という言葉もあり、イベント成功の安堵の様子がうかがえました。



ワークショップの様子。たくさん聞いて、たくさん話した2泊3日



ランチの時間も話はたえない



議論もとことん、手は抜きません

27年目に迎えた節目

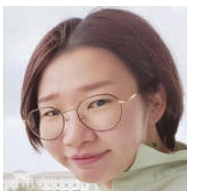
春の「ザ・フォーラム」、夏の「ユース・フォーラム」の開催は、長い歴史の中で代々の大学生を中心とした実行委員会が毎年、試行錯誤を重ねながらオリジナルでつくりあげてきました。実行委員が議論を重ね、3月の開催を最終回にすることを決定しました。残念ではありますが、27年間、二つのフォーラムをつくりあげ、その熱意と経験を次の代に引き継いできてくれた、現役実行委員、OB・OGの皆さん、本当にありがとうございました。ユース・チームの活動については、また改めて報告します。



参加学生と実行委員全員とで記念写真



シャプラニールの運営にかかわる理事・評議員から、ご自身の活動や専門性の高いトピックに焦点をあててレポートいただきます。タイムリーな話題、広い視野から多角的な海外協力の今をお伝えします。



PROFILE

よしかわ・みのり

大学時代にバングラデシュの地域研究を専攻していたことから、大学3年次に半年間シャプラニールのインターン生として過ごす。現在は大学の職員として、国際協力に関心のある学生たちのサポートを行う。2020年よりシャプラニール評議員。

ゆるやかに続くバングラデシュとの縁

シャプラニール評議員／大学職員 吉川 みのり

会員の皆さん、こんにちは。評議員の吉川みのりと申します。会報になにか書いてほしいと言われ、わたしに何か書けるかしらと思いつつ、少しシャプラニールやバングラデシュと私のかわりを書かせていただこうと思います。こんな人もいるのだなと、思っていたけると嬉しいです。

シャプラニールでのインターン

まず、シャプラニールとの出会いは大学生の時です。わたしは大学でバングラデシュの地域研究をしていました。高校生の頃から国際協力

に関心があり、国際協力を特定の地域から学びたいと思い、大学を選びました。バングラデシュを地域に選んだのは本当に偶然ですが、いい選択だったと思います。そんなわたしにとって、シャプラニールに出会うのはごく自然なことでした。

最初は講演会に参加するだけだったのですが、大学3年生の時にインターンに応募しました。当時の海外活動グループ（現事業推進グループ）で半年間インターン生として過ごしました。この時は、シャプラニールが家事使用人として働く少女支援のためのクラウドファンディングをしていた時期です。バングラデシュ

リキシャ(※1)を見るとダッカにきたなと思います



に卒業論文と修士論文で、家事使用人について書きました。今思うと、シャプラニールに出会っていなければ、修士号を取ることもなかったのですね。

いまの仕事とバングラデシュ

ここからは、今の話になります。修士を卒業後、私は民間企業に就職をしました。私より

も、両親を含めた周りの人たちが、大学6年間と一切関係のない就職先でいいのかと心配していましたが、就職しないと生きていけません。しかし、周りの心配は当たるもので、1年待たずに転職をして、今の仕事に就きました。大学時代のご縁もあり、今は都内の大学で職員をしています。仕事の一環で、フィールドスタディ(※2)のサポートと引率をしており、行き先の一つにバングラデシュがあります。社会人になっても大学時代に身につけた知識や言語が役に立つというのは大変嬉しいことです。

また、国際協力に関心のある大学生たちとかわかることは、わたしにとって何よりも楽しい時間です。バングラデシュについて何も知らなかった学生たちが、現地での経験を通して、多くを吸収し、バングラデシュにまた行きたいと言っているのを聞くと、この仕事をしていてよかったと感じます。また、わたしの大学時代よりも国際協力に関心のある学生が増えたように思います。

これからの50年に向けて

さて、ここまで長い自分語りをしてしまいました。ここまで読んでいただいている皆さん、ありがとうございます。会員の方の中には、私が生まれる前からシャプラニールとかかわりがあるという方もきつというっしやるでしょう。

それぐらい、長い歴史と多くの方に愛されているシャプラニールで、評議員ができることを嬉しく思います。50年以上もの長きにわたり、バングラデシュとネパールにかかわり続けたシャプラニールが、次の50年をどう生き抜くのか、皆さんと一緒に見届けていきたいと思っています。シャプラニールとして変わらない部分、時代とともに変わらなければいけない部分があると思います。シャプラニールらしさを残したまま、次の50年に向けて、新しいシャプラニールになることを私は期待しています。

国際協力に関心のある学生が増えたと書きましたが、多くの人にとつての「海外」はまだまだ欧米が中心だと感じます。そのような社会の中では、大学で学んだことを、その後に活かさない、というかつての私のような思いを抱えている方も多いのではないのでしょうか。現在、大学で働いていて、国際協力を仕事にするというイメージがついていない学生をよく見かけます。わたしもそうでした。若い世代も巻き込みながら、世代を超えて知恵を出し合い、次の50年、そしてもっと先に向けて、前に進む団体であり続けてほしいと思います。ここまで読んでいただきありがとうございます。

※1 市民の足として親しまれている三輪の自転車タクシーのこと。日本の人力車が名前の由来とされている。

※2 現地実習とも呼ばれ、海外などの現地に赴き、調査・研究をすること。大学では授業の一環として行われる事が多い。



ダッカ市内にある国定記念碑(ショヒド・ミナール)前。学生を引率した時の様子



Craftlink
クラフトリンク
#Who is SHE?



エイブルアート・ジュートバッグに 新デザイン登場！

報告／小川 晶子（クラフトリンク担当）

ユニークなイラストが目を惹くジュートバッグの動物シリーズに新しく「マンドリル」が加わりました。このイラストを描いたエイブルアート・カンパニー所属の尾崎文彦さんもバッグの商品化をとても喜んでくださいました。エイブルアート・カンパニーは、障害のある人のアートを社会に発信するため、3つのNPOが協力し2007年から運営する事業体です。自己実現と社会参加の側面だけでなく、作品を仕事につなげる活動を推進しています。

尾崎さんをサポートする方から、「力強い線で描かれた動物のカタチが魅力の作品なので、ジュートの素朴で温かみのある素材感がとてもマッチしていますよね。朗らかでマイペースな尾崎さんの人柄も、ジュートバッグのおおらかでナチュラルな雰囲気に通じるものを感じます」と嬉しいコメントをいただきました。



動物の絵を得意としている
尾崎さん



作品を納品した企業の施設にて
(右端が中塚さん)



ジュート布にイラストを
印刷している様子

バッグのパーツを縫い
合わせている様子

会報に同封のクラフトリンクミニカタログや、オンラインショップで新作バッグをはじめとする商品をご覧ください。



このコーナーではシャプラニールをさまざまな形で支えてくれる皆さまの、シャプラニールとのかかわりや海外協力への思いなどをご紹介します。



シャプラニール事務所でボランティアに参加する
同好会メンバー

シャプラニールと一緒に ボランティアの視野を 広げていきたい

学習院女子中・高等科
ボランティア同好会

ボランティア同好会について

ごきげんよう。学習院女子中・高等科のボランティア同好会です。私たちは週に2回昼休みにミーティングをおこない、放課後にはシャプラニールや病気の子どもたちの支援施設、高齢者グループホーム、献血ルームといった施設でボランティア活動をしています。長期休みには東日本大震災で大きな被害を受けた福島県相馬市を訪れ、被災者の方にお話を伺い、防災について学んでいます。また、これらの活動を多くの方々に知ってもらえるよう、私たちの学校で11月に開催される八重桜祭で模造紙にまとめ、発表しています。

シャプラニールとのつながり

シャプラニールとは主に2つの活動をさせていただいております。1つ目は放課後活動です。放課後活動では主に寄付されたはがきや外国通貨の仕分けなど幅広いボランティアに取り組んでいます。2つ目は防災をテーマにした活動です。今年1月には荻窪のエベレスト・インターナショナルスクールで、同世代のネパール人生徒の皆さんと一緒に「インクルーシブ防災」について考えるワークショップに参加しました。3月には同じメンバー

で、初期消火や地震シミュレーターの体験などの防災訓練や、書き損じはがきを使って防災のメッセージを訴えかけるアートを制作しました。

今後に向けての期待

私たちはシャプラニールとの活動を通して、普段はできない、とても貴重な体験をすることができ、ボランティア活動の視野が広がったように感じています。今後もシャプラニールと継続的な活動をしていきたいと考えています。私たちの活動を多くの方に知っていただき、それが広がっていくように、これからも一緒に活動に取り組みたいと心から願っております。



災害時に誰も取り残されないインクルーシブ防災について
考えました

東京事務所・バングラデシュ事務所・ネパール事務所では約40名の職員が働いています。
国際協力NGOの職員が今、考えていることを語ります。



ネパールでの日本語教師時代、担当したクラスの学生のみんなと（中央）

「好き」からつながった世界

コミュニケーショングループ 広報担当 下鳥 舞佳（しもとり・まいか）



PROFILE

美術大学を卒業後、ミャンマーの自立支援の団体、日本・ネパールでの日本語教師の仕事を経て、2021年にシャプラニール入職。広報担当として、ウェブサイト、SNS運用を行うほか、イエティのLINEスタンプ等広報物も制作。

国境を越えたはじめての一步

子どもの頃から絵を描いたり何かをつくったりするのが好きで、その気持ちのまま美術大学に進学しました。当時の私にとって、自分の手の届く範囲だけが世界で、それ以外はただのテレビの中の情報。国際協力はおろか外国で起きていることほとんどに興味がありませんでした。

そんな世界が一変したのは、大学二年生の春。学科の教授が主催したインドネシアで現地の学生と一緒にワークショップに参加したことがきっかけでした。言葉もわからない中でたくさんのかかわりを共有した二週間、「言葉の通じない外国人の人」は「かけがえのない友人たち」になり、一気にテレビの中のできごとが自分ごとに変った感覚がありました。そこから、異文化で育った人たちから受ける、心地のよい、ときにびりりと痺れる刺激にどハマりしてしま

自分なりにめざした国際協力の道

い、その後は好奇心の赴くままにバックパックを持って飛行機に乗り、いろんな人たちに会いに行きました。「大好きになった国々とかかわりを仕事にできたら最高なんじゃないか」そんな思いを抱き始めたのが大学四年生の頃。ただ、現地の人から何かを搾取するような一方的なビジネスはしたくない、じゃあ大好きな国との一番いいかわり方ってなんだろうと考える中で出てきたのが国際協力の道でした。

進みたい方向は決まったけれど、国際協力についての知識もないし周りに聞ける人もいない、どこから歩き始めればいいのか……。もやもやの中で、とりあえず自分が学んできた「デザイン」や「何かをつくる」力

のできることをやってみようと国際協力団体のインターンやアルバイトの求人を探し、片っ端から応募。結局、残りの学生

大学時代は個人でミャンマーへ取材に行ったこともありました。その時のご家族と（筆者は中央）

誰かの一步目をつくれるように

生活でたくさんの活動にかかわることになりました。実際に支援現場を見に行ったり、大きなプロジェクトを任せてもらえたり、自分が執筆したSNS投稿に共感した方から高額な寄付が届いたり……。個人的な「好き」の気持ちで始めたことでしたが、だんだんとわずかも遠い国の誰かとの助け合いの輪に入れたようなそんな気持ちになっていき、「国際協力を仕事にする」ことがいつしか私の夢になっていました。そして、大学卒業後、学生時代のつながりからミャンマーの自立支援を行う団体に就職、その後、日本・ネパールでの日本語教師の仕事を経て、今、「同じ市民の立場から」活動を続けるシャプラニールにたどり着きました。曲がりくねってはいいましたが、一本道をまっすぐ歩いてきたと自分では感じています。

広報担当として入職して3年、まだまだひよっこですが、活動をわかりやすく、より多くの人に興味をもってもらえるような魅力的な表現を日々模索しています。最近、自分がネパールで日本語を教えていた学生や外国出身の友人たちにシャプラニールのイベントに登壇してもらうことが度々ありました。「こんな経験をさせてくれてありがとう」なんて言われるけど、



バングラデシュの友人に登壇してもらった多文化共生コミュニティスペース「マザリナ」のイベントにて（前列左）

この場にたどり着くまでにたくさんさんの機会と気づきをもたらしたのは私の方です。出会いと経験を物々交換のように繰り返して、今ようやく大好きな国との一番いいかわり方を見つけたような気がします。

1月にシャプラニールの公式Xでイエティのマスコットがかわいい！と大きく拡散されましたが、それを見てボランティアにきてくださった方が何名かいらつしました。国際協力は「何かしなきゃ」という問題意識から始まるものだと思う方も多かもしれませんが、でも入口はもっとたくさんあっていいと思います。私の世界がそうして広がっていったように、誰かにとってシャプラニールが国際協力に一步を踏み出すきっかけとなるように、もっともつと活動や活動国の魅力を知って大好きになってもらえるように。正しく、わかりやすく、そして面白さも忘れずに、発信し続けていきたいです。

東京マラソン2024チャリティ報告

報告／高階悠輔(コミュニケーショングループ チーフ)

3月3日、快晴のスポーツ日和に東京マラソン2024が開催されました。東京マラソンでは、寄付を行うことでチャリティ活動を広げるチャリティランナーとして出走することができる取り組みがあり、シャプラニールは寄付先団体として参加しました。バングラデシュで家事使用人として働く少女たちの支援のため、国内外から31名の方々が参加くださいました。

大会前に開催された東京マラソンEXPO2024には、チャリティランナーの皆さんが私たちの出展ブースを訪れ、「チャリティランナーとして参加できてとても嬉しい!」「皆さんの活動、とても大事だと思います。応援しています!」と、マラソンへの抱負

※ 個別ラウンジは、東南アジアで小児医療支援を行うNGO「フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー-JAPAN」と協働で運営し、マッサージ提供などのご協力をいただきました。



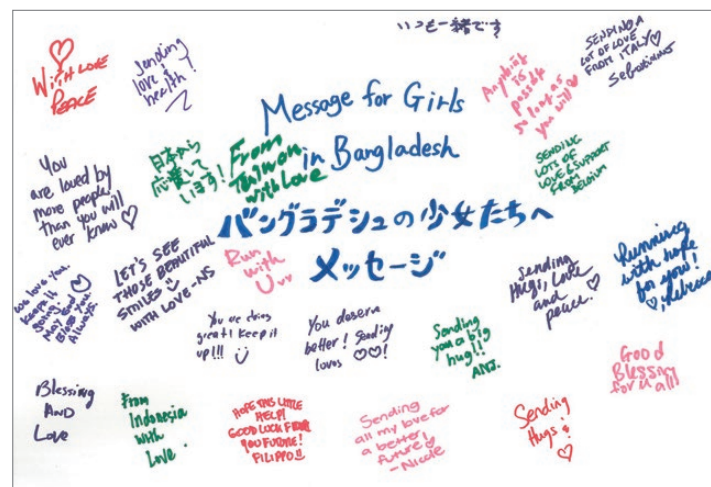
やチャリティへの思いを伝えてくださいました。

大会当日、沿道応援にはボランティアも参加し、熱烈にランナーの皆さんを応援しました。中にはシャプラニールの応援隊を見つけて駆け寄ってくださるランナーの姿も!

多くのチャリティランナーの皆さんが42.195kmを完走。フィニッシュ後にランナーとの交流の場として設けた個別ラウンジ(※)に立ち寄ってくださった皆さんは笑顔でした。全力を出し切った姿を見て、本当に胸が熱くなりました。チャリティランナーとして出走してくださった皆さま、心より感謝申し上げます。ありがとうございました!



ランナーの熱い走りを見て沿道応援にも力が入りました



ランナーの皆さんから働く少女たちへのメッセージ



シャプラニールは東京マラソンチャリティ2024の寄付先団体です。©東京マラソン財団

シャプラ
文化部

文・写真／ダハル・スティブ
(コミュニケーショングループ)



意外に知られていない
ベンガル料理

ボッタ

皆さんはベンガル料理をどのくらい知っていますか。今回は、私がバングラデシュの出張中に味わった自宅で簡単につくれる「ボッタ」のレシピをご紹介します。

「ボッタ (Bhorta)」は、野菜や魚などを潰してスパイスと混ぜ合わせてつくる人気のベンガル料理です。南アジアの料理でよく使われる玉ねぎ、トマ

ト、にんにく、生姜などの野菜をベースに、お好みでターメリック、コリアンダーなどのスパイスを使ってつくります。すりつぶした野菜そのものの味を豊かなスパイスが引き立て、独特な風味と深い味わいを生み出します。

ボッタは日本のさまざまな野菜とスパイスを使ってつくれるので、ぜひ挑戦してみてください!

バングラデシュ事務所のハワさん直伝の
ボッタレシピ!



●材料(4人分)

(メインの野菜) お好みの野菜を1種類選んでください
ジャガイモ ……中4個(茹でて皮を剥く)または
ナス ……2本(皮を焦がし、皮を剥く)または
トマト ……中サイズ5個(半分に切って焼く)
(共通の材料)

玉ねぎ ……小1/3個(スライス)
青唐辛子 ……1/2本(みじん切り) ※お好みで調整
A パクチー ……2本(みじん切り) ※お好みで調整
油 ……小さじ1
塩 ……お好みで少々

●ジャガイモボッタのつくり方

ボウルにジャガイモとAを入れ、全体を手でつぶしながらよく混ぜて、完成!

同じ方法で、メインの野菜を替えればトマトボッタやナスボッタもつくれます。油の代わりにマスタードオイル、または和からし(油に溶かす)を使用すると本格的な味わいを楽しめますよ。

バングラデシュではごはんと数種類のボッタ、ダルスープ(豆のスープ)などを混ぜながら食べるのが一般的です。つくった感想はダハルまで。お待ちしております!



野菜は朝に市場で購入



唐辛子、パクチー、玉ねぎ(手前から右回り)



ナスを直火で焼くハワさん流



焦がした皮を丁寧に剥く



トマトを手ですりつぶす様子



ナスのボッタ



トマトのボッタ



ジャガイモのボッタ

学生と防災意識を広めるアート企画

新宿区の学習院中・高等学校と杉並区のネパール人の多く通うエベレストインターナショナルスクールの学生と一緒に、あらゆる人を取り残さない防災、「インクルーシブ防災」の考えを広める企画を実施。1月にインクルーシブ防災をテーマにワークショップで誰もが認知できるマークを制作し、3月には寄付された約1万枚のはがきを使いマークを巨大なアート作品として制作し、SNSで発信をしました。はがきは制作終了後、換金し防災活動などの資金に。学生の皆さんからは「国際交流ができた」「古いのはがきを見るのが楽しい」「仕分けボランティアも参加したい」などの感想が寄せられました。

コミュニケーショングループ ダハル・スディブ



全長21メートルの作品と参加者と

「アースデイ東京2024」出展報告

4月に開催されたアースデイ東京にて、クラフトリンクの商品を販売しました。「昔の商品持っています!」「ネパール産のコーヒーは珍し

い」とお声をいただき、シャプラニールをよく知る方や初めて知る方と、商品の背景や生産者の皆さんのことをお話しする機会となりました。販売にはボランティアの皆さんにご協力いただきました。ありがとうございました。

コミュニケーショングループ 長瀬桃子



ご来場ありがとうございました!

会員総会のご案内

以下の通り、2024年度の会員総会を開催いたします。正会員の皆さまはぜひご参加ください。

- 日時 2024年6月22日(土) 13:30-16:30
- 会場 ビジョンセンター市ヶ谷
3階306室(東京都千代田区
九段南4-8-21 山脇ビル)
(Zoom利用によるオンライン併用)

■議題

1. 2023年度活動報告案および決算案
2. 2024年度活動計画案および予算案
3. 定款変更案
4. 理事・監事・評議員の選出

※正式な案内・資料は正会員の皆さまへ別途郵送いたします。

事務局長交代のご挨拶

2023年度末をもって小松事務局長が退職し、元シャプラニール・ダッカ事務所長の藤岡恵美子さんがその職を引き継ぐことになりました。新しい体制となるシャプラニールに、ぜひご期待ください。

小松 豊明 前事務局長

2001年1月に入社してから約23年間、シャプラニールで大変多くのことを学ばせていただきました。右も左もわからず国際協力、NGOの世界に飛び込んだ私に、さまざまな経験を与えてくれたことに心から感謝しています。

ネパールの駐在員時代、歴史や文化、習慣が全く異なる人々と接する中で、自分自身の考え方や物事の捉え方が大きく変わっていくのを感じました。福島での復興支援活動では、それまで見ていなかった現場のリアリティや、地域に入り込むことの難しさなどを経験しました。

そしてJICAでも国連でもなく、NGOの立場で国際協力に携わり、市民社会の一員としてなすべきことは何なのかを考え続けたこの20数年間は、私にとって大きな財産となりました。

事務局長としては10年間、組織運営を任せていただき、ネットワークの広がりやシャプラニールの存在感を示すといった点ではある程度貢献できたのではないかと考えています。一方、NGOや国際協力を取り巻く環境が劇的に変化中、新たな道を切り拓くという役割を十分果たせなかったと反省もしています。そのあたりは、経験豊富な藤岡さんの活躍に期待したいと思います。これまで、本当にお世話になりました。皆さまのお力添えに心から感謝申し上げます。

藤岡 恵美子 新事務局長

2011年2月に退職後、理事や評議員としてかかわってききましたが、事務局に戻るのは13年ぶりとなります。社会の変化とともに大きな転換期にあるシャプラニールで、事務局長という重責を担うことになり、身の引き締まる思いとともに、大好きなシャプラニールでまた働ける嬉しさも感じています。

シャプラニールは長い間、日本から資金や人を送って南アジアの取り残された人々を支援する活動を地道に続けつつ、フェアトレード商品の販売や開発教育など国内での活動も行ってきました。2年前からは多文化共生の事業も始まっています。これからは、さらに双方向の活動が必要になっていくだろうと思います。

バングラデシュで事務所長をしていた約15年前、グラミン銀行のユヌスさんにお会いした際、「日本はこれから高齢化で大変だ。バングラデシュには若い人たちがたくさんいる。これがバングラデシュの一番の財産だ。必要ならこの宝を輸出してあげよう(笑)」と言われたことを思い出します。

バングラデシュやネパールとの長く深いご縁を活かしつつ、南アジアの取り残された人々も、さまざまな困難を抱えた日本も、ともに元気にしていけるような存在にシャプラニールがなれたら、と願っています。



小松前事務局長(左)と
藤岡新事務局長(右)

事務局 だより

- 2024年4月から東京事務所のグループ編成が変わり、総務会計グループ(チーフ杉山)、事業推進グループ(チーフ勝井)、コミュニケーショングループ(チーフ高階)、クラフトリンクグループ(チーフ小川)となりました。これまで市民アクション推進グループが担っていたクラフトリンク以外の業務はコミュニケーショングループが担当します。
- 2024年4月と5月、現地事業のモニタリングのため、事務局長・藤岡と事業推進グループチーフの勝井、コミュニケーショングループの下鳥がネパールに出張しました。
- 4月末で、コミュニケーショングループ・支援者窓口を担当していた鈴木香緒理さんが退職しました。6年半、ありがとうございました。これからは会員、ボランティアとしてシャプラニールを支えてくれます。後任は藤井星子さんです。

会報誌「南の風」へのご意見・ご感想をお寄せください! どんなことでも構いません。お待ちしております。

Email press@shaplaneer.org 会報誌「南の風」担当宛



SHAPLANEER

夏期募金 2024 にご協力をお願いします

2024年6月1日(土)～8月31日(土)まで



子どもたちが働かず「自分の未来」を描ける社会へ

ILO（国際労働機関）によると、ネパールでは約108万人（2021年）、バングラデシュでは約170万人（2013年）の5歳～17歳の子どもたちが児童労働に従事していると報告されています。私たちはバングラデシュのストリートチルドレンの支援を機に2000年から児童労働の削減と予防に取り組んでいます。「児童労働を生み出さない社会の実現」には、

国や行政の意識改革や時には法整備が必須となり、今後も粘り強く取り組んでいく必要があります。

2024年は、バングラデシュ・ダッカ市内に家事使用人として働く少女が基本的な読み書きや計算などを学べる支援センターを新設する予定です。

今後も安定した活動を継続するため、夏期募金でのお力添えをどうぞよろしくお願い申し上げます。

あなたのご寄付でできること

例えば… 3,000円のご寄付で、家事使用人として働く少女たちが支援センターでの学習に使う1年分の教材、4名分の費用に相当します。



※ご寄付は児童労働の削減事業を含むシャプラニールの活動全般に活用します。 ベンガル語の文字を学ぶ少女

ご寄付の方法

会報誌に同封の募金ちらし（振込用紙）を使用し、お近くの郵便局よりお振り込みいただけます。右記QRコードまたはシャプラニールのウェブサイトからもご寄付を受け付けています。

https://www.shaplaneer.org/youcan/donate/season_donate/



※シャプラニールへのご寄付は確定申告による税の優遇措置の対象となります。